

大沼公園寫生紀行

兒島虎太郎

五月十日晴天。午前七時遠來の珍客M君に北海道の大公園大沼を紹介すべく、M君K君僕同行三人、函館發の一番列車の客となつた、處が内地下んだりの田村丸の連絡客のため各車共満員で、多くの客は立ん坊となつたが、繪を學ぶ徳だらう、僕等には三脚様が有るので御蔭で助かつた。桔梗驛をすぎ七重驛に着いたら、梅桃櫻等が咲き香ひ、エメラルドの野菜の花などが美しく、いろ／＼の花の一時に咲く様は、僕等の地方では見られぬとM君は感心する。其の内に汽車が本郷驛に着したので、江差や大野に行く人々は圓太郎馬車に乗りかへるので下車したために余等はベンチの人となつた。本郷驛より汽車は登りとなつた、峠を進行中、遠く南に汽船の煤煙に包まれた函館の臥牛山が、夢の様に車窓から見えた。其の内にトンチルに入り、約五分間はダンマリで、明りくなつたと思ふたら、我汽車は洋々たる大沼の中を走つて居つた、北には焼石の、ライトレッドに光る渡島富士の駒ヶ岳を見て、函館を發して約一時間、我が汽車は大沼驛に停車した。大沼／＼と驛夫の聲に、余等と共に車外にハキ出された人は澤山有つた。大沼は周回八里で、北に劍の如き駒ヶ岳を望み、大小三百の島嶼は松島の様で有る、余等はセバットと云ふ處で、二三の島を前景に例の富士を寫すべく草原に三脚を下ろした。H君は大沼は人工的だねと云ひ筆を取つて居た。僕も一生懸命に書いた。繪の八分通り出來た頃、

M君の足下でガサ／＼云ふので、皆の視線がM君の足下を見た時、三尺餘りも有らうと云ふ蛇がニウーとも云はず出たので、M君は飛上つたが、蛇先生も其の聲に驚いたか沼の中へ泳ぎ出したが一時は皆々へ印には顔色なくパツクのて有つた。大沼の絶景を呈するは秋で、萬島の紅葉が赤く水に寫る時で有る。中食に龜の湯温泉宿に引上げ、食後舟で鮎釣りと出かけ、數尾を釣り、三時より市街の寫生に行き、龜の湯に歸つたは四時で、手釣の鮎で夕食は又何とも云はれぬ。食後又候夕陽を寫すべく三脚を手にブラ／＼出かけたが、沼畔の夕陽を一枚づゝ仕上げ、歸路所々を見物し、宿に歸へつたら早七時で、數行の雁の月下を飛行する様は秋の様で有つた。

春鳥會新會友

大阪市北區堂島濱通一ノ六十六

松代安太郎

日本水彩畫會新會友

長野縣下高井郡往郷村

山田直一郎

福井市尾上下町

某

兵庫縣加古川町内加古川町

佐々木忠雄

北見國網走郡美幌村大通三丁目

萬宮俊二

三重縣鈴鹿郡坂下村市瀬

山川國三

岡山縣兒島郡琴浦村大字下村

高田三郎